4-48

歴史的街区におけるコミュニティ形成に関する基礎的研究Ⅱ
～町屋の転用と再利用について～

日本大学生産工学部(院)　○村山　大基
日本大学　宮崎　隆昌

1.　研究の背景と目的

今日，世界的に循環型社会に入り，使われなくなったものに新たな価値を見出し，いまあるストックを有効活用しようとする時代を迎えた.既存資源を有効活用する建物再生は，これからのエコ社会，循環型社会に求められる緊喫な課題であるといえる.

その中で京都は,1200 年を超える悠久の歴史の中で磨き上げられた文化と景観が息づく歴史的景観の優れた都市である.先人達が永年にわたり,守り,育ててきた日本文化の精華です.伝統文化を継承しながら,常に新しい文化を受け入れることによって都市空間を継起してきた京都は,日本を特徴づける「和」の美意識の発祥の地であり,今も新しい日本独自の文化を生み出し続ける創造の地でもある.歴史環境のなかで伝統文化を継承しながら，常に新しい文化を受け入れることによって都市空間を更新してきた.「まちづくり」の過程で，都市の伝統や美意識を忘れることなく,「近代化」「歴史的景観や風致景観の保全」を両立させるため，さまざまな試行錯誤を繰り返してきた.そうした更新の積み重ねの結果,京都は伝統を保持し，なお活力ある都市として今日に至っている.

また,既往研究との位置付けにおいては,京町屋に関する研究は,長らく景観保全の立場から京町屋の伝統様式の解釈と,状態良好な特定町屋群に対する保存・修景実践の時代を経てきたが,近年は残存する膨大な町屋資源を現代的要求に適したものとして再生する方法が模索されている.こうした動きに先駆けた研究として,チェントロストリコ研究会は,町屋の建物類型別分布特性と居住者・事業者の町屋に対する保存･継承意識と要求の分析を通して,町屋を動態的に活用してゆく必要を説き,京町屋の保存・継承に関する都市計画技術の基本的な在り方を示した.この研究と,続く京都都心町屋悉皆調査の成果によって,京都市中心部における町屋残存状況が初めて具体的に把握された.またここでの実態をもとに示された保存・継承策は,その後,京都市の都市政策課題に反映され,職住共存地区を再生するガイドラインとして整備されている.

そこで本研究は,用途転換や耐震補強,また構成要素の変換を行うことで,その形態を維持しながら,現在でも利用･活用されている町屋に着目することにより,ストック型の生産システム,持続可能な建築空間の利用形態を評価し再生への方途を検討することを目的とするものである.

2.研究の調査方法

町屋再生前後での用途の変更，間取り・空間の利用方法の変化過程を把握することにより，町屋の空間構成，町屋再生による利用形態の特性を抽出できると考えられる.本研究では対象地域となる京都市中京区内26 軒の町屋において，測量，写真撮影，聞き取り調査を行い，町屋再生の空間的利用形態についての把握を試みた.

3.調査対象地の概要

研究対象地域は京都市中京区とする.
中京区は昭和 4 年 4 月，上京区の南部，下京区の北部を区域として誕生した.京都市のほぼ中央に位置し，面積は 7．38 ㎞で,京都市の 1.2%を占めている.地形はおおむね平坦だが南西方向へゆるく傾斜している.商業・ビジネスの中心であるが，夜間人口も多く，長屋や路地など，居住地としての環境も合わせ持つ.また,祭りや伝統文化も受け継がれ，職住文遊の共存するまちであると考えられる.

本研究では中京区の堀川通～寺町通・丸

Fundamental study Ⅱ about the community formation in the historic area.
-A study about the use switch of Machiya.-
Daiki MURAYAMA and Takamasa MIYAZAKI

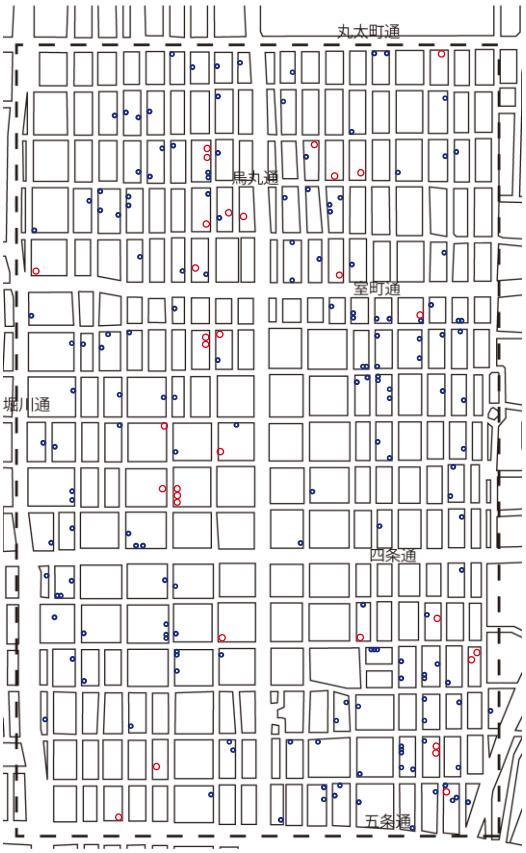

Fig. 1　京都市中京区

太町通～五条通で囲まれた範囲を研究対象地とする.

選定理由として,京都の町並みの中でも町屋の特に多い地域であること,歴史的景観が多く保存されていることが挙げられる.

4. 調査実績

調査対象地内に存在する町屋総数 120 軒.内，用途転換されていた町屋がプロットの 80 軒.内，図面などの詳細データを入手出来たのが中抜きプロットの 26 軒である(Fig. 1).

5. 町屋の定義

町家とは，一般に町なかにある家，商家などを指す.間口に比べて奥行の方が長く，「短冊形」と呼ばれるような敷地形状である.主に都市の中心部や宿場町等で，高い密度で人々が住み，商業や手工業などの産業活動が営まれた地域に多く立地する.用途は主に商業や手工業が営まれた職住併用住宅が中心であるが，専用住宅である仕舞屋も含まれる.

6. 町屋の用途転換

本研究では，町屋の空間利用の判断基準を明確にするため，町屋を以下の 3 つの物理的タイプに分類する.元来町屋とは住居または職場としてのみ使われていた場合がほとんどで,そのため隣家と密接しつながり併用されながら存在していたのに対し,現在では職住分離,町屋自体の住居としての快適性の欠如などの要因によって,かつて住居であった部分を店舗として利用していることが多くなっている.

調査結果として,外観は既存のままの姿を残し利用されているものが大部分であるのに対し,内部は以前の住居としての形を変え,それぞれに適応した空間として変化していることが確認できた.

その中でも,その空間変化を最大にもたらす存在が坪庭と廊下の関係性にあると考えたため,大きく分けてこの 2 点の位置関係が違うことで,町屋の空間としての機能がいかに異なるものに変化するのかを次にまとめた.

A タイプ：空間分節型

空間分節型は廊下，坪庭によって町屋自体が分節され，異なる空間になっている場合や，プライバシーを確保するために意図的に分けられている空間構成の町屋のことで,他のタイプに比べプライバシーを確保する力が強い(Fig. 2, Fig. 3).

Fig. 2　A タイプ内観

Fig. 3 A タイプ動線

Fig. 4　B タイプ内観

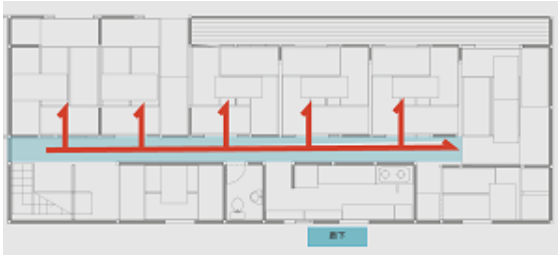

Fig. 5 B タイプ動線

Fig. 6 C タイプ内観

Fig. 7 C タイプ動線

B タイプ：内部空間連続型
内部空間連続型は，廊下，坪庭が奥，または横に存在し，外の空間との隔たりを守りつつ内空間を開放的に見渡すことのできる大きな一つの空間になることができる．他のタイプに比べ連続的な一つの空間が連続する(Fig. 4, Fig. 5)．

C タイプ：外部空間連続型
外部空間連続型は外部空間と一体になっている廊下を介すことで，各部空間や，坪庭に直線的にアクセスすることができる(Fig. 6, Fig. 7)．

7. 調査結果

調査結果を下記に示す(Table. 1)．

A タイプ　串くら，キンシ正宗，一之舟入，三賀旅館，紫織庵，石原旅館，吉田商店，計 7 軒．

B タイプ　IREMONYA DESIGN LABO，オステリア蒼，CAMERON，光泉洞寿み，川とも，長者庵孫助，豆菜，百足屋，繭，麩屋町左近太郎，石不動之町，恵美須屋町，筋屋町，西押小路町，西六角町，計 15 軒．

C タイプ　Dog café，丸益西村屋，和座百衆，志村設計事務所，計 4 軒．

8. まとめ

A タイプは他の 2 つのタイプに比べ比較的大きな町屋に使われることが多く，町屋を小さく分節することによって得られるプライバシーを必要とする個室の多い旅館や比較的高級な飲食店などで用いられるパターンが多くみられた．また，3 つの中で最も坪庭に重点を当てていて，換気，採光の点においても坪庭を活用している場合が多かった．また，坪庭を一望できるように部屋を

No.	名称	A タイプ	B タイプ	C タイプ
1	Dog cafe			●
2	IREMONYA DESIGN LABO		●	
3	オステリア蒼		●	
4	キンシ正宗	●		
5	一之舟入	●		
6	丸益西村屋			●
7	CAMERON		●	
8	串くら	●		
9	光泉洞寿み		●	
10	三賀旅館	●		
11	紫織庵	●		
12	石原旅館	●		
13	川とも		●	
14	長者庵孫助		●	
15	豆菜		●	
16	百足屋		●	
17	繭		●	
18	和座百衆			●
19	志村設計事務所			●
20	麩屋町左近太郎		●	
21	石不動之町		●	
22	恵美須屋町		●	
23	筋屋町		●	
24	西押小路町		●	
25	西六角町		●	
26	吉田商店	●		

Table. 1 タイプ別分類一覧

区切られている場合も多くみられた. そのため，坪庭が大きく，廊下からも一望できるようになっているものも存在した.

B タイプは廊下，坪庭が町屋の端によっているので, 空間を大きく使いたい場合や, 時には大部屋として使う必要がある場合に多く用いられていた. また, 小さい町屋の場合このタイプが用いられている場合が多く, 小さい空間を最大限使う例が確認できた. 空間としては，他の 2 つに比べて自由に構成できる部分が多いため，比較的現在の住居に近い形で使えることが多い. 用途転換の場合もっとも多く使われるタイプであった. 使用形態はさまざまで, 小さい規模の居酒屋からカフェ，売店にいたるまで多方面で使用されているタイプであった.

C タイプは外部空間と連続的な廊下をもつことで，路地，廊下，坪庭が連続となって自由に出入りできる空間になっているものが多く，気軽に入れるため住民のコミュニケーションの場として使われることもあるタイプである. 気軽に入れる空間として機能しているため，待合所やギャラリー，動物と入れるカフェなど，交流を促すような空間づくりが行われていた. このタイプも坪庭を大切にしている町屋が多く，坪庭を中心としてそこにつながる路としての町屋，という空間ができているものも見られた.

今後, 今回の知見を基にさらに調査を進めることによって町屋としての用途転換を明確にし, これからの町屋や用途転換の役割について明確にしていくことが必要であると考えられる.

[参考文献]

・高橋康夫；京町家・千年のあゆみ-都にいきづく住まいの原型-，芸術出版社，(2001)
・山本良介；京都　建築の町並みの「遺伝子」，建築資料研究社，(1999)
・京都市中京区役所区民部企画総務課：中京区基本計画，(2001)
・内閣官房市再生本部事務局：まちづくり町家の再生と活用，(1998)
・島村昇　鈴鹿幸雄；京の町屋(1973)
・宗田好文；転換期の京町屋再生, 青山吉隆編著「職住共存の都心再生」(2002)
・宗田好文；町屋・街並み景観整備による都心商業・商店街活性化手法の研究-職住共存の町屋街区の魅力とにぎわいの演出-(1999)
京町屋作事組「町屋再生の技と知恵-京町屋のしくみと再生の手引き」(2002)